発問例

●一八六ページ

問 ⊙「一人の男」（7行目）とは、誰か。また、このような表現をしたのは、なぜか。

答 「一人の男」とは下人を指し、①新たな場面転換を印象づけると同時に、②緊張感（サスペンス的感覚）を与えるためにこのような表現をした。

補 第三者的に客観化した視角で下人を描くことによって、一瞬、第二の人物の新登場であるかの錯覚を与え、緊張感を生んでいる。改めて下人に着目させる手法である。

●一八七ページ

問 「にきび」（1行目）のここでの効果は何か。

答 男が下人であることを指示する効果。

補 再び「下人」と呼ぶための仲立ちの役割。

問 ⊙「それ」（4行目）は、どのようなことを指しているか。

答 誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしいこと。

補 直前の「その濁った、黄色い光が、……映ったので」と理由の提示があるのがヒントとなる。

問 「この雨の夜に、この羅生門の上で」（5行目）とは、どのような状況を表しているか。

答 死体置き場となった羅生門が、常人の近づくはずのない異常で不気味極まる場所となっている状況。

補 羅生門の上が、下人に日常世界と隔絶した空間として把握されていることを見る。

問 火を「とぼす」（2行目）「ともす」（5行目）の二つの語と同様の例をあげなさい。

答 「さびしい」「さみしい」、「けぶり」「けむり」、「とぶらい」「とむらい」など。

補 バ行とマ行の相通現象。

問 「やもりのように足音を盗んで」（6行目）とは、どのような様子を表しているか。

答 気配を消して足音を立てずに闇をはう様子。

補 「やもり」の比喩と「足音を盗む」の意味に注意する。

●一八八ページ

問 ⊙「ある強い感情」（2行目）とは、具体的にはどのようなことか。

答 「六分の恐怖と四分の好奇心」（8行目）。

補 死骸の中にうずくまっている人間を見たという、予想外の異常な事態に対する恐ろしさ（頭身の毛も太る）と、その不思議さへの衝撃的な驚きである。

問 「檜皮色の着物を着た」（4行目）「背の低い」「痩せた」「白髪頭の」「猿のような」（5行目）と修飾語を畳みかける表現は、下人のどのような様子を表しているか。

答 一気に老婆に関心が集中しながら、衝撃のために次々に断片的に特徴をつかむことしかできない様子。

補 下人が恐怖と好奇心に駆られて老婆の姿を何とか確かめようとする様子である。

問 「頭身の毛も太る」（9行目）とは、どのようなことか。

答 身の毛がよだつこと。異常な恐ろしさの形容。

問 「恐怖が少しずつ消えていった。」（13行目）のはなぜか。

答 刺激に慣れるに従って恐怖心から髪の毛の抜け方に関心（好奇心）が移っていったから。

補 16行目の一文に着目する。

問 ⊙「激しい憎悪」（14行目）とは、どのようなものか。

答 死人の髪の毛を抜くという行為に対する衝動的、感情的、生理的な拒絶反応から生まれる怒り。

補 「反感」（16行目）の語からも、この憎悪が「合理的」なものではなく、感情的、反射的なものであることが分かる。

問 作者は、「語弊がある」（16行目）でどのよう

なことを述べようとしているか。

答 下人が抱いた感情は「老婆に対する激しい憎悪」ではなく、むしろ「あらゆる悪に対する反感」であるということ。

問 **「一分ごとに」（16 行目）という表現からどのようなことが読み取れるか。**

答 数分間見つめていて、その過程で「憎悪」が次第に増していくという心の変化が起こったこと。

補 「六分の恐怖と四分の好奇心」の「分」と比べて、「分」の意味をはっきりさせる。

●一八九ページ

問 **「合理的には、……知らなかった。」（6 行目）とは、どのようなことか。**

答 老婆の髪の毛を抜く行為が不可解なるがゆえに、論理的に善悪を判断できなかったということ。

補 「合理的」は論理的に筋道を立てて理解するしかたの意。

問 **◉「それだけで」（7 行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ（だけで）。

補 「それ」が指す具体的な事態は、「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」である。「だけで」の限定は、行為の善悪を判断する根拠と判断のしかたを意味する。行為の善悪の判断が、合理的な根拠を欠いたまま、その場の雰囲気に左右されて理屈抜きで、情緒的、感覚的になされる、ということである。

語句の研究

●一八六ページ

7 一人の男が　「それから、何分かの後である。」という時間の断絶による場面転換によって、新たな事態の発生を告げる。「下人」という呼び方を用いず、「一人の男」として第三者的に客観化した視角で、あらためて新場面を読者に印象づけている。「にきび」によって下人だと分かる仕掛けである。

8 猫のように身を縮めて、息を殺しながら　「身を縮めて、息を殺しながら」は、同じ「縮める」の語を用いながら、前段の「首を縮めながら」（P 一八五・16）の緩慢な動作とは対照的に緊迫感に満ちた展開を促す。危険に対して身構える動物的な本能を感じさせ「猫のように」の直喩が利いている。心理的な静から動への転換でもある。

9 赤くうみを持ったにきびのある頬である。　「男」が前段の「下人」と同一人物であることを確認させ、再び「下人」に戻すための仲立ちをする効果がある。また、火に照らされた「赤くうみを持ったにきび」は、下人の高まる緊張感と恐怖心を効果的に描写している。

●一八七ページ

2 高をくくっていた。　せいぜいその程度と決めてかかる。前段の「どうせ死人ばかりである。」（P 一八六・4）を受ける。

4 すぐにそれと知れたのである。　「それ」は「上では誰か火をとぼして、……動かしているらしい。」（P 一八七・3）を指す。

5 この雨の夜に、この羅生門の上で　人間はおろか生き物の影さえ絶え、雨と闇に囲繞された羅生門の楼上は、濃密な恐怖の雰囲気をたたえた不気味な非日常的世界として現出している。「この」はその異常な状況を強く指示する。誰かがいるとすれば、それ自体がすでに異常なのだ。「どうせただの者ではない。」（P 一八七・5）はずだ。

5 火をともしている　「ともす」と「とぼす」（P 一八七・2）のマバ行相通で変化をつ

けている。「とぼす」のほうが非日常的で異常事態の描写に、一般的な「ともす」が指示、説明の文脈で、と使い分けられている。作者の文体への細部までのこだわりの一例。

6やもりのように足音を盗んで　「足音を盗む」は、足音をさせないようにそっと。人間の気配を消して闇をはう下人に、夜はい出してきて捕食行動をする「やもり」の直喩は的確である。

9幾つかの死骸が　散乱する死体の具体的な描写は原典には見られない作者の独創で、「或阿呆の一生」に芥川の解剖見学の記事が見える。「彼はその死体を眺めていた。それは彼には或短編を、(f)(g)王朝時代に背景を求めた或短編を仕上げる為に必要だつたのに違いなかつた。が、腐敗した杏あんずの匂に近い死体の臭気は不快だつた。」（「九死体」）。また、恒藤恭あての書簡に「医科の解剖を見に行った。二十の屍体から発散する悪臭には辟易せずにはいられなかった。」（大正三年三月十日）とある。

11裸の死骸と、着物を着た死骸　盗人や琇に荒らされた死体と最近運ばれてきた死体であろう。

16永久におしのごとく黙っていた。　「おしのごとく」は沈黙の死の世界の比喩であろうが、人権意識の点で問題を含んでいる。教場での指導に当たっては、十分に配慮していただきたい。後出「おしのように」（P三一・10）も同様である。

●一八八ページ

2ある強い感情が、……この男の嗅覚を奪ってしまった　「ある強い感情」とあるのは、予期しない突然の衝撃の強さを強調する。その後、分析的に「下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。」（P二九・11）とあらためて説明される。「ある強い感情が……奪ってしまった」という欧文直訳体擬人法の表現も、不意打ちの衝撃の強さを印象づける。

4檜皮色の着物を着た、……猿のような老婆である。　「強い感情」に促されて目を剝いたまま、一気に老婆に関心が集中してゆく下人の反応が、「檜皮色の着物」「背の低い」「やせた」「白髪頭」「猿のような」という形容の畳みかけによって示されている。特に最後の「猿のような」という動物の直喩は、他の描写が個々の属性を示すのとは違って、老婆の存在全体を一つかみにして異形の者としての印象を決定的にしている。前行に「人間を見た」とあるが、まともな人間として見えるはずがない。

8六分の恐怖と四分の好奇心　「ある強い感情」（P二九・5）を分析的、説明的に敷衍して、好奇心とないまぜになりながら、より恐怖心が勝った心理状態を六分、四分と数量的に表現した。「恐怖」と「好奇心」はともに、全く思いがけない事態に直面した衝撃に対する本能的な反射心理である。その強度の緊張が呼吸さえ忘れさせている。

9旧記の記者の語を借りれば　「今昔物語集」巻二十四第二十話「人妻成悪霊除其害陰陽師語」に「頭毛太リテ怖シキ」とあり、巻二十七第十六話「正親大夫、□若時値鬼語」に「頭ノ毛太リテ、心地モ悪ク思エケレバ」とある。同じような表現は、巻十二、巻十四にもある。「頭身の毛も太る」は異常な恐ろしさの形容。身の毛がよだつ。

11猿の親が猿の子のしらみを取るように　既出の「猿のような老婆」（P二九・8）を受けて、老婆の行為が動物の本能的なしぐさとして印象づけられる。猿が毛を掻き分けては一匹ずつしらみをとるように、毛根

を分けて次々と抜き取るさま。「申の刻」（P一八八・5）を受けての芥川の遊び心かと想像してしまう表現である。

12 髪は手に従って抜けるらしい。　頭皮の腐敗のために、手を引けばそのまま抵抗なしに抜けていくさま。その自然さが一層の不気味さを感じさせる。

13 その髪の毛が、……恐怖が少しずつ消えていった。　刺激に慣れるにつれて反応が弱まっていくという現象（反応強度の逓減化）。髪の毛が抜けるのを繰り返し見るのに応じて順次恐怖が薄れてゆく心理過程を論理的、段階的に語る理知的、技巧的な表現。

14 この老婆に対する激しい憎悪　死者を冒瀆する行為のおぞましさに対する拒絶反応から生じた怒り。一般的、世間的な道徳感情による善悪の判断から出た反応ではなく、衝動的、直感的な倫理感覚として、また生理的な身体感覚として、人間のあり方そのものを汚すものへの嫌悪感に由来する「悪」への憎しみである。

14 少しずつ動いてきた。　恐怖感が沈静化し判断力が相対的に回復する。その結果、老婆を異様な存在と見ることから、人間として見ることへの転換が起こる。この過程で、おぞましさに対する拒絶反応は恐怖から憎悪へと形を変えてゆく。

15 あらゆる悪に対する反感　この「悪」は、醜怪さにおいて、人間の日常性の範囲を突き破り、人間性の根源を掘り崩す行為である。人間のあり方の根源に触れた禁忌の侵犯としての絶対悪と見なされるがゆえに、一般的、世間的な道徳感情に由来する相対的で個別的な悪（例えば「盗み」のような）をとがめる次元を超えて、「悪」そのものへの絶対的な否定、「悪」の存在自体を全否定する反応をもたらす。

16 一分ごとに　「分」は、時間の「分」であろう。少なくとも数分間は老婆の行為を見つめていたことが分かる。少し前に「六分の恐怖と四分の好奇心」（P一八八・8）の表現があり、「恐怖が少しずつ消えていった。」（P一八八・13）「激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。」（P一八八・14）とあるので、「分」を量的に解する可能性も皆無ではないが、その場合は「一分ずつ」とあるのが自然。

●一八九ページ

3 老婆の床に挿した松の木切れのように　たいまつの火を憎悪の燃え上がる比喩に使っている。景と情の融合した印象的な比喩の使い方である。

6 合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。　行為の理由（動機）が不明な以上、行為を筋道立てて納得のゆく形で善悪の判断を下すことができない。「合理的」は理にかなう意。論理的。

7 この雨の夜に、この羅生門の上で　この表現は、梯子を上がりかけた場面に既出（P一八七・5）。そのときなされた「どうせただの者ではない」という予断が楼上の老婆の行為を目撃して確信となる。

7 それだけですでに許すべからざる悪であった。　「それ」は、直前の「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」を指す。陰惨な雨と闇に包まれ、寄りつく者もなく荒廃を極めた羅生門の不気味で異常な空間でなされる老婆の不気味で異常な行為は、そのおぞましさに対するほとんど生理的な嫌悪感から一切を判断させてしまうがゆえに、理屈抜きの本能的な否認の対象である。「それだけで」という強い限定は、下人の判断が、合理性を欠き、衝動的な、その場の雰囲気に左右さ

れる情緒的な反応においてのみなされていること、いわば気分の問題にすぎないことの確認である。人間性の根源にかかわる善の表出は、感情的、瞬間的な正義感を活性化する。だが、これはその場限りの生々しい気分の噴出というあり方のために、日常的な行為の次元では永続できずに終わるのである。一考として、人間の死体遺棄が日常化する門の上で、暗闇と憂鬱な雨が支配する中、死体の冒瀆という人倫を犯す行為に悪を許さない潜在意識のスイッチが入ったという解釈もできる。

8もちろん、下人は、……盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。

「とうに忘れているのである」という言い方に、軽薄に心変わりする下人に対する語り手の揶揄的な響きを読み取る見方がある。だが、そもそも、下人が強い覚悟で「盗人になる気でいた」のでないことは明らかだ。「悪」に踏み切る寸前まで行っていたのに、たちまち「悪」を憎悪する側に回ったとみるから軽薄な転向に見えるにすぎない。実際は、「盗人になることを〈考えていた〉ことなぞは、とうに〈消し飛んでしまった〉」ので、衝撃の強さは言えるとしても、軽薄な心変わりなどという大それたものはない。「盗人になる」ことがすでに潜在的に心の志向としてあったに違いない。が、それと実際に「やる気になっていた」との間には踏み越えるべき断絶がある。「盗人になる気でいた」とあえて断言的に語る語り手の意図的な軽薄に、読み手が乗ることはない。「もちろん」は、〈言うまでもなく〉、「飢え死に」か「盗人」かなどに心を向ける余地もないほど下人の心理は切迫していたという状況の確認である。「このとき、誰かがこの下人に、……問題を、あらためて持ち出したら、恐らく下人は」（P一八八・16）とあるように、「飢え死に」か「盗人」かいう問いは、ここでは、第三者による仮の設定であり、下人自身にそんな余裕はない。

キー・ポイント　悪を憎む心　「盗人になる」以外に選ぶべき道はないと考えていた下人が、老婆の行為を見て「何の未練もなく、飢え死にを選」ぶのでは、唐突で軽薄、単純かつ身勝手、無反省な下人の幼児性すら示すものであるという批判が起こるのは不思議ではない。だが、これは人間にとっての「善悪」の意味を平板に一元的に捉えたための誤解である。「盗人になる」という場合の「善悪」と「死者の冒瀆」の場合のそれとには断絶がある。〈盗人にも三分の理〉というように、「盗人になる」場合の「悪」は相対世界の道徳的価値判断に左右される問題である。しかし人間性の禁忌に触れる「悪」は何人によっても人間の名において断罪されうる次元にかかわっている。たとえ下人が「盗人になる」悪を心に抱いていたとしても、そのことがただちに「死者の冒瀆」を憎悪する善に立つことと矛盾するとは言えないのである。状況に促されたある瞬間には、人間は、たとえどんな世俗の極悪人でも、利害や損得抜きに、その痛ましさに惻隠の情を発し、その酷さに憎悪の情をたぎらせることがある。「盗人になる」悪を第一の選択肢としていたからと言って、下人が老婆の行為のおぞましさに憎悪を燃え立たせたことを〈目くそ鼻くそを笑う〉類の話に矮小化して批判するのは、あまりに形式論理である。下人はここで人間性の根源にある「善」の可能性に触れている。批判がありうるとすれば、むしろ問題はその先にあると言うべきである。人間性の根源から発する善の反応は、以後の下人の行動の帰結に明らかなように、決して

持続的に形成されるものではないという点こそ、指摘されねばならない。理路を欠いた衝動的反応にすぎぬために、日常的な行為の場面では、（おそらく宗教的な回心の場合を除いて）、この善は生き延びることはできない。ここで芥川の「蜘蛛の糸」の主人公の善が結局はたった一回の行為でしかなかったことを思い出してもよい。

＊パーティーの準備はとうにできていた。

注意する語句

（＊で用例を示した）

息を殺す…息もしないでじっとしている。
＊ライオンが息を殺して獲物の様子をうかがっている。

高をくくる…大したことはないと見くびる。侮る。
＊それほど難しい問題ではないと高をくくっていたが、大きな間違いだった。

語弊がある…言い方が適切でないために起こる弊害。
＊駄作だと言うと語弊があるが、魅力に乏しい作品であることは間違いない。

とうに…早くに。ずっと前に。とっくに。